



## 社会科学における学習評価の設計： 単元「都市形成の論理」の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-03-08 キーワード: 作成者: 細川, 遼太, 藤本, 将人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006016">https://doi.org/10.32150/00006016</a>

## 社会科における学習評価の設計

—单元「都市形成の論理」の場合—

細川 遼太・藤本 将人\*

北海道教育大学大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育学専修大学院生

\*北海道教育大学教育学部釧路校社会科教育学研究室

## Strategy for Educational Evaluation in Social-Studies

Developing a unit on the Logic of City Formation

HOSOKAWA Ryota and FUJIMOTO Masato\*

Department of Social-Studies Education, Student of the Graduate School of Education, Hokkaido University of Education

\*Department of Social-Studies Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

### 概 要

本稿は、社会科における学習評価の設計のあり方を明らかにすることを目的としている。先行研究により、社会科における学習評価は、社会科教育を通じて育成・形成される具体的な学習成果を評価することと位置づけられている。子どもたちに授業を通じて育成・形成される学習成果は、単元の具体的な内容に加え、学習課題を探究する際に形成された認識も含まれている。学習課題を探究する際に形成された認識を評価するためには、新たな事例に対する認識の再構成過程を見取ることが必要である。そのためには授業を通じて育成・形成される知識や考えを確定させることが前提となるため、①具体的な授業として单元「都市形成の論理」を開発し、②单元「都市形成の論理」における学習成果を確定した。③確定した学習成果に基づき、单元「都市形成の論理」における評価規準の作成を行い、④評価規準に基づく評価問題試案を作成した。以上の4つの手順を踏まえ、本稿の課題にアプローチした。

### I はじめに

本稿は、社会科における学習評価のあり方を明らかにすることを目的とする。社会科における学習評価とは、社会科の理念が具体化される学力を、社会科教育を通じて育成・形成される具体的な学

習成果として評価することである<sup>1</sup>。

社会科教育学における学習評価に関する研究については、①既存のテスト問題や評価プログラムを分析対象とし、評価対象となる学力を明らかにする研究、②社会科授業における児童・生徒の認識変容を見取る研究、の二つのアプローチがある。

前者の代表的な研究には、棚橋健治のものがあげられる<sup>2</sup>。棚橋は、アメリカの社会科教育で用いられたテスト問題や評価プログラムを対象とし、子どもの社会認識、市民的資質がどのようになったのかという点に着目し、実際に評価される学習成果の分析を行っている。分析結果から、実際に評価される学習成果は、知識だけではなく、判断や態度についても評価が可能であることを明らかにしている。

後者の代表的な研究には、池野範男らのものがあげられる<sup>3</sup>。池野らは、社会科における評価法について、児童・生徒の学習課題に対する認識の変容に着目し、分析を行っている。分析結果から、子ども達の学習結果は、教師が定めた認識変容の段階から分析できることを明らかにした。

棚橋と池野ら以前の社会科における評価の研究は、社会的事象の意味を解答させるなど知識を評価の対象とする傾向にあった。棚橋と池野らの研究は、社会科で育成する資質や能力に対応する学習成果を解明することで、社会的事象についての知識とは別の、社会科において評価が可能な領域を明らかにした。

授業を通じて子どもに育成・形成される学習成果は、学習した範囲における具体的な内容と、学習課題を探究する際に形成された認識である。学習した範囲における具体的な内容の学習評価は、棚橋や池野らの研究が示すように、明らかにされた評価可能な領域に基づき、具体的な内容と対応する評価目標を設定し、評価方略を決定することで設計される。

一方で、学習課題を探究する際に形成された認識については、学習課題に対する認識の再構成過程を見取ることが必要となる。子どもたちは既存の知識や考え方の限界を知ること、その解決策を探究し再構成することで、新しい知識や考えを育成・形成している。これら一連の過程を評価できる学習評価を解明する必要がある。

そのためには、①授業を通じて獲得されると期待される学習の成果を可視化し、②可視化した学習成果を評価するための規準を社会科の理念から

設定する。③学習成果を具体的に見取るための評価法を具体化し、④単元レベルでの児童・生徒の学習成果の獲得の過程を見取ること、以上四点の段階を踏まえた学習評価を設計することが前提となる。

そこで本稿では、①具体的な授業として単元「都市形成の論理」を提示し、②授業で獲得することが期待できる学習の成果を確定し、③確定した学習成果に基づき、評価規準の作成を行う。そして、④評価規準に基づいて評価問題の試案を作成する。以上四点の手順を踏まえる事により、本稿の課題にアプローチするものとする。

## Ⅱ 単元「都市形成の論理」の概要

本稿の目的である社会科における学習評価の設計について明らかにするために、本節ではまず、評価の対象となる授業の構造を説明したい。

### 1. 単元の目標と意義

国内各地には、人々や活動の拠点となる都市が存在している。都市では、周辺部に比べ、モノや情報などのサービスが豊富にある。そのため、一般的に都市は、様々なサービスを受ける事が出来る便利な地域と捉えられている。

また、都市では、周辺部に比べ、多くの人々が集まっている。多くの人々が長年に渡って育んできた街並みや気風が各都市の魅力として掲げられている。そのため、都市は、人口の集積を前提とし長い年月をかけて形成された地域として捉えられている。

しかし、都市は、一端疫病が広がれば被害が拡大しやすく、消費生活が活発であればある程大量のごみが投機され、火災が起これば類焼の可能性も高くなる。このように被害の拡大の危険性を抱える都市は、利便性以上に多くの問題を内包している地域ともいえる。

また、もともと人口が少なかった地域であったものの、北海道の札幌市、旭川市、釧路市など北海道の開拓を目的に形成された都市に見られるよ

うに、政治主導で都市が形成された事例がある。さらに、もともと人口が集積されていたものの、中国の上海など一時期人口が減少した都市に見られるように、政府の政策などにより都市が衰退した事例もある。

このように、利便性のある地域としての都市や、人口の集積を前提とする地域としての都市という、二つの一般的イメージでは、そもそも都市が形成された理由や、都市が活性化及び衰退する理由について説明することが不十分といえるだろう。そのため、都市の形成、活性化、衰退にあたって、どのような見えない力が働いているかを探求し、説明することが必要である。

民主主義社会に生きる市民を育成するためには、人間一人ひとりが自分の生き方を考え、なおかつ、他人に生き方を預けないことが前提とされる<sup>4</sup>。学校教育、特に社会科においては、日常生活に働く見えない力「権力」を可視化させ、自分たちの生活が不可視の権力の網の目の中でどのように育まれているか明らかにし、説明できるようになる能力の育成が求められている。生徒にとってなじみ深い都市を扱うことで、都市の形成、活性化、衰退について説明し、都市に関わる権力の具体的な役割を探求することが可能となるだろう。

では、都市の形成、活性化、衰退について説明するためには、どのような観点が必要となるのだろうか。1885年から1894年にかけて、北海道の道東開拓の拠点として建設された、現在の北海道標茶町にあたる旧熊牛村の市街地形成過程を事例に考えてみよう。

旧熊牛村の市街地は、政府による北海道の道東開拓という目的を達成するために、1885年、釧路集治監を中心に形成された。政府は、釧路集治監の開庁にあたり、集治監・市街地の建設及び、囚人の収容と職員の配置による人的・物的資源の動員を行った。すなわち、旧熊牛村の市街地形成の契機は、政府という権力機構の合意による人的・物的資源の動員である。

釧路集治監の開庁から、1894年前後にかけて、

旧熊牛村の市街地は、各種店舗や民家の他、病院、小学校、郵便局が設置され、当時道東で一番の賑わいをみせていた釧路に匹敵する活気をみせていた。これらの施設は、政府の目的と直接的に関係あるものでなく、生活している人々の暮らしを保障するために必要とされる施設である。したがって、市街地の活性化は、住民が自身の生活を保障するために新たな権力機構を構成し統合したことが要因となる。

本単元は、以上のように、都市における権力機構の役割を対象とし、都市形成における権力機構の意思決定の過程に関する見方を獲得させることを通して、都市の形成、活性化、衰退について具体的に説明することができる能力の育成を意図したものである。

## 2. 単元の構成

### (1) 単元の構造

本単元は、導入、展開1・2、終結の4つの部分から構成されている。その計画は以下の通りである。

導入	都市形成についての一般的イメージの具体化
展開1	都市形成の契機についての探求
展開2	都市の活性化についての探求
終結	都市形成についての捉え方の再構成

(筆者作成)

導入部では、都市の捉え方について考えていく中で、「なぜ、都市は形成されるのだろうか」という学習課題を把握させる。展開部では、都市形成における権力機構の意思決定の過程について、事例を用いて探求させる。展開1では都市の形成の契機となる権力機構の合意、展開2では都市の活性化の要因となる住民による新たな権力機構の構成について、1885年から1894年の旧熊牛村を事例として探求させる。終結部では、学習のまとめとして、都市の捉え方について見方を再構成させる。

## (2) 単元の展開構造

表1に示すように、導入部では、都市の利便性と人口の集積を前提とした観点から都市の捉え方を具体化させる。そして、利便性と人口の集積を前提とした観点による都市の捉え方では、都市に内在する問題、人口の集積を前提としなくても都市が建設されることなどから矛盾が生じることを確認させる。さらに、都市が形成される契機、都市が活性化する要因、都市が衰退する要因など、都市形成の論理について疑問を抱かせる。

展開部は、その役割の上で、1・2に分ける事が出来る。展開1では、1885年に旧熊牛村の市街地が形成された契機について探求させる。旧熊牛村の市街地は、当時の政府による北海道開拓の前線基地を設置するという合意により、釧路集治監を中心に周辺の市街地が形成され、人的・物的資源を動員されたことを理解させる。

展開2では、1885年から1894年にかけての、旧熊牛村の市街地の活性化について探求させる。釧路に匹敵するにぎわいをみせていた時期の旧熊牛村の市街地は、住民が自身の生活を保障するために、各種店舗や産業に関わる施設の他、教育を保障する機関としての小学校、健康を保障する機関としての公立病院を設置し、新たに人的・物的資源を動員したことを理解させる。

終結部では、これまでの学習の成果を踏まえ、都市形成について、権力機構の役割から捉えさせる。そして、都市形成の契機は権力機構の合意によること、都市の活性化は住民自身によって新たに権力機構が構成されること、これらに影響していることを理解させ、都市形成の捉え方について見方を再構成させる。

## Ⅲ 期待される学習成果の確定

評価問題を作成するにあたり、まず評価のテスト内容、すなわち本単元の学習によって期待される成果を確定する。そのために、本単元の学習によって、子どもが認識する都市形成の論理について、指導案を基に構造化し、図1として示した。

本単元で形成している都市形成に関する知識は、大きく二つの知識群に分かれる。第一の知識群は、「政府や企業などの権力機構が目的を達成するための活動の拠点を設置し、人的・物的資源を動員することで、都市はつくられる。」(知識3)に統括されるものである。これは、知識(5)を頂点とする知識(6)から知識(13)までの知識群からなる。第二の知識群は、「住民自身の生活の保障のため、様々な機関を構成し、人的・物的資源を動員することで、都市は活性化する。」(知識4)に統括されるものである。これは、知識(14)を頂点とする知識(15)から知識(26)までの知識群からなる。これらの知識は図の上部に向かうほど一般性の高い上位の知識となり、下部へ向かうほど具体的で個別的記述的なものとなる。

これら二つの知識群は、各々、複数の事実を初期条件(C)と結果(E)とし、それらを法則(L)でつなぐことにより<sup>5</sup>、都市形成の論理の説明を行っている。図1中の太線で示した箇所が、このような都市形成の論理の説明である。それ以外の細かい箇所では、原則的には、下位から上位へ向かう場合には知識の統括がなされ、上位から下位へ向かう場合には知識の個別化・具体化がなされる。

授業を受ければ、子どもたちには、図1で表されるような知識のネットワークが形成される。したがって、評価は学習成果としてのこの知識のネットワークが、本当に形成されているかどうか、この図に示された知識を保持できているかどうか、知識の構造を確認し、同一の知識群の中に位置づけて概括したり個別化・具体化したりできるかどうか、C、E、Lに位置づけて因果関係を説明できるかどうか、といったことを判定することになる。

学習成果をこのような知識と説明の構造として図化し、明確にすることにより、問題文等で提示する知識、内容、解答として子どもから提示させる知識内容の根拠が示されることになる。

## IV 評価の開発

### 1. 社会科固有の思考についての評価の前提

思考は知識の成長を通して捉えるものであり、次に示す二点に分類されている<sup>6</sup>。①物事をみる枠組み自体の拡大・整備あるいは変革すること（質的な成長）、②すでに持っている枠組みの中でそれに適合する情報を集積し、それによって枠組みを精緻化すること（量的な成長）。

知識の質的な成長、量的な成長に基づく社会科固有の思考とは、棚橋健治によると、社会科学者が社会的事象に投げかける分析的質問を子どもが自ら使いこなして、社会的事象に関する自らの知識を成長させることである<sup>7</sup>。具体的には、仮説形成と検証によって規定されている。

社会科における仮説形成と検証は、次に示す四段階の社会認識からなる。①個別的・具体的あるいは一般的・抽象的社会的事象の識別・確認、②識別・確認した社会的事象・概念に関する知識を前提とした類化、③隔たりのあるいくつかの個別的あるいは一般的な社会的事象から全く新しい上位の命題の創造、④探求方法や方法概念自体についての探求<sup>8</sup>。

上述した四段階の社会認識は、②を達成するためには①の獲得を前提とし、同様に③を達成するためには②、④を達成するためには③の習得を前提としている。すなわち、社会科固有の思考は、仮説形成と検証に規定され、より高次の質的・量的な知識の成長に至る四段階の社会認識から構成されているといえる。

### 2. 社会科固有の思考についての評価の開発

社会認識固有の思考を規定する仮説形成に基づき、評価の段階を次の四段階として示す。

第一は、授業において直接学習した内容に基づき、個別的・具体的あるいは一般的・抽象的社会的事象の識別・確認する段階である。第二は、授業において直接学習した分析的質問を想起する段階である。第三は、授業において直接学習していない社会的事象に対して、分析的質問を用いて新

たな仮説を立てる段階である。第四は、第三の段階で立てた仮説について、その枠組みに当てはまる事実や概念を識別する段階である。

都市形成の論理についても、それぞれの見方・考え方において、4つの要素を四段階の社会認識に組織化することができる。

第一段階は、「1885年、釧路集治監が開庁した。」や「釧路集治監の開庁により、旧熊牛村の人口は急激に増加した。」などの個別的・具体的社会事象や、「政府が北海道の道東の開拓を行うため、釧路集治監を中心に人的・物的資源を動員することで熊牛村の市街地はつくられた。」や「政府や企業などの権力機構が目的を達成するための活動の拠点を設置し、人的・物的資源を動員することで、都市はつくられる。」などの一般的・抽象的社会的事象を識別・確認する段階である。

第二段階は、「都市形成の契機は権力機構の合意であり、都市の活性化は住民自身によって新たに権力機構が構成されることに影響している。」など、授業において直接学習した分析的質問を想起する段階である。

第三段階は、「都市には、都市を形成する目的を達成するために、政府や企業などの権力機構の合意によって建設される。そのため、事件や経済の悪化などにより、政府や企業などの権力機構が都市から撤退したり、目的を喪失したりすることで、都市は衰退する。」という、授業において直接学習していない社会的事象に対して、新たな仮説を立てる段階である。

第四段階は、第三段階で立てた仮説について、「1842年、清とイギリスの間で、講和条約である南京条約が締結された。」や「南京条約によって、上海はイギリスに開港された。」という個別的・具体的社会事象を識別したり、「上海は、経済活動を自由に行うために建設された都市である。しかし、第一次世界大戦後の中国人のナショナリズムの覚醒、1942年末の太平洋戦争の開戦により日本の管理政策の激化、1949年中国共産党による上海開放により、衰退に至った。」という一般的・抽象的社会的事象について識別する段階である。

### 3. 評価規準と評価目標の作成

授業における学習者の学習評価は、社会認識固有の思考を規定する仮説形成に基づき進められる。

評価の基本的な目的は、学習テーマである都市形成の論理に関して、権力に着目し、仮説形成と検証を行えるかどうかを確かめることである。仮説形成と検証に規定された社会科固有の思考の段階が評価規準になるように、評価目標を設定する。評価目標としては次の通りである。

- 現在の北海道標茶町にあたる旧熊牛村の市街地の変遷を通して、都市形成の論理を分析することができるかどうかを判定する。

この目標は、都市形成の論理の命題となっている2つの一般的・抽象的社会的事象を習得することで達成される。2つの一般的・抽象的社会的事象は以下の通りである。

「政府や企業がある目的を達成するための活動の拠点を設置し、人的・物的資源を動員することで、都市はつくられる。」

「住民が自身の生活の保障のため、様々な機関を構成し、人的・物的資源を動員することで、都市は活性化する。」

これらの知識に到達させるために、次のような問いに対する答えを探求させる。

「なぜ、都市は形成されるのだろうか。」

表1 単元の展開

パート	教師の指示・発問	教授・学習活動	資料	生徒に獲得させたい知識
導入部	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の都市といえばどのような場所を思い浮かべるか？</li> <li>世界の都市といえばどのような場所を思い浮かべるか？</li> </ul>	T：発問する P：答える T：発問する P：答える		<ul style="list-style-type: none"> <li>例えば、東京、大阪。</li> <li>例えば、ニューヨーク、ロンドン。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>都市の基準とは何か？</li> <li>都市の問題点は何か？</li> <li>従来から人口が多いことは、都市の基準となるか？</li> <li>中国の深圳のように、もともと人口や建築物が少ない地域であったとしても、急速に都市が形成される場合もある。</li> </ul>	T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：調べる T：説明する	資料1 資料2	<ul style="list-style-type: none"> <li>モノや情報が集まって便利なこと。／人口が従来から多いこと。</li> <li>病気が蔓延しやすい。／火災や災害による被害が拡大しやすい。</li> <li>北海道の札幌、釧路のように、もともと人口が少なかった地域でも都市は作られる。</li> </ul>
	◎なぜ、都市は形成されるのだろうか？	T：発問する P：考える		・分からない、考えてみよう。
展開1	<ul style="list-style-type: none"> <li>北海道標茶町は都市といえるか？</li> <li>その理由は何か？</li> <li>人口が集積し、モノや情報が集まり、北海道釧路市に匹敵するにぎわいを見せいていたとしたら都市といえるか？</li> <li>1885年に至るまで、現在の北海道標茶町に位置する旧熊牛村は原野であった。しかし、1885年から1894年にかけて、旧熊牛村には、人口が集積し、モノが集まり釧路に匹敵するにぎわいを見せる市街地が形成された。</li> <li>○旧熊牛村に市街地を建設した契機は何か？</li> </ul>	T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：説明する		<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえない。</li> <li>・人口が少ない。／モノや情報が少ない。</li> <li>・いえる。</li> <li>・人口やモノの集積の観点では、1885年から1894年にかけて、旧熊牛村でも見受けられた。ただし、旧熊牛村は、従来から人口が集積されていた地域でない。</li> <li>・急に人々が住みたい街になったのではないか…</li> </ul>



終結部	終結	<p>・現地の人々は何を目的に、病院、商店、学校、郵便局、警察分署、銀行に関わる施設を設置するのだろうか？</p> <p>○1885年から1894年にかけて、旧熊牛村の市街地が活性化した理由は何か？</p>	<p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p>	<p>・自身の生活の保障。(知識26)</p> <p>○1885年から1894年にかけて、熊牛村で生活する住民が、自身の生活を保障するために、各種店舗や産業に関わる施設の他、教育を保障する機関としての小学校、健康を保障する機関としての公立病院を設置し、新たに人的・物的資源を動員したため。(知識14)</p>
	導入	<p>○旧熊牛村が建設された契機は何か？</p> <p>○1885年から1894年にかけて、旧熊牛村の市街地が活性化した理由は何か？</p>	<p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p>	<p>○旧熊牛村に市街地を建設する契機は、政府によって北海道の道東開拓の拠点熊牛村に設置したためである。釧路集治監を中心に人的・物的資源が動員され、都市形成が進められた。(知識5)</p> <p>○1885年から1894年にかけて、旧熊牛村に人口が集積された理由は、現地で生活する住民が、自身の生活を保障するための施設や人々を動員したためである。病院、商店、小学校などを建設し、人口を集積することとなった。(知識14)</p>
	展開	<p>○都市が形成される契機は何か？</p> <p>○都市が活性化する要因は何か？</p>	<p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p>	<p>○政府や企業が、目的を設定し、活動の拠点設置のために、人的・物的資源を動員すること。(知識3)</p> <p>○居住している人々が自身の生活の保障のため、様々な機関を構成し、人的・物的資源を動員すること。(知識5)</p>
	終結	<p>◎なぜ、都市は形成されるのか？</p>	<p>T：発問する P：答える</p>	<p>◎都市形成の契機は権力機構の合意であり、都市の活性化は住民自身によって新たに権力機構が構成されることに影響している。(知識1・2)</p>

(筆者作成)

- ・資料1…「倒壊した浅草の凌雲閣、通称“十二階”」伊藤和明『日本の地震災害』岩波書店、2005、p.6. 引用。
- ・資料2…「東旭川兵村全景(明治末期)」村上孝一「移住、開墾と開拓期の生活」山田伸一他『北海道開拓記念館 常設展示解説書5 開けゆく大地』北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会、2000、p.9. 引用。
- ・資料3…「北海道標茶町の人口の推移」平岡昭利編『北海道 地図で読む百年』古今書院、2004、p.146. 引用。
- ・資料4…「釧路集治監で行った事業と作業①」三栖達夫『釧路短期大学生涯教育センター 第5講座 テキスト 標茶の歴史(3) 釧路集治監』、釧路短期大学・標茶町教育委員会、1994、p.27. より筆者引用作成。
- ・資料5…「釧路集治監で行った事業と作業②」三栖達夫『釧路短期大学生涯教育センター 第5講座 テキスト 標茶の歴史(3) 釧路集治監』、釧路短期大学・標茶町教育委員会、1994、p.27. より筆者引用作成。
- ・資料6…「繁栄期の標茶市街の様子①」三栖達夫『釧路短期大学生涯教育センター 第5講座 テキスト 標茶の歴史(3) 釧路集治監』、釧路短期大学・標茶町教育委員会、1994、p.49. より筆者引用作成。
- ・資料7…「明治三十年の北海道標茶町の市街地の様子」寺島敏治『釧路短期大学生涯教育センター 第1講座 テキスト 標茶の歴史(1) 標茶歴史点描』、釧路短期大学・標茶町教育委員会、1992、p.17. より筆者引用作成。

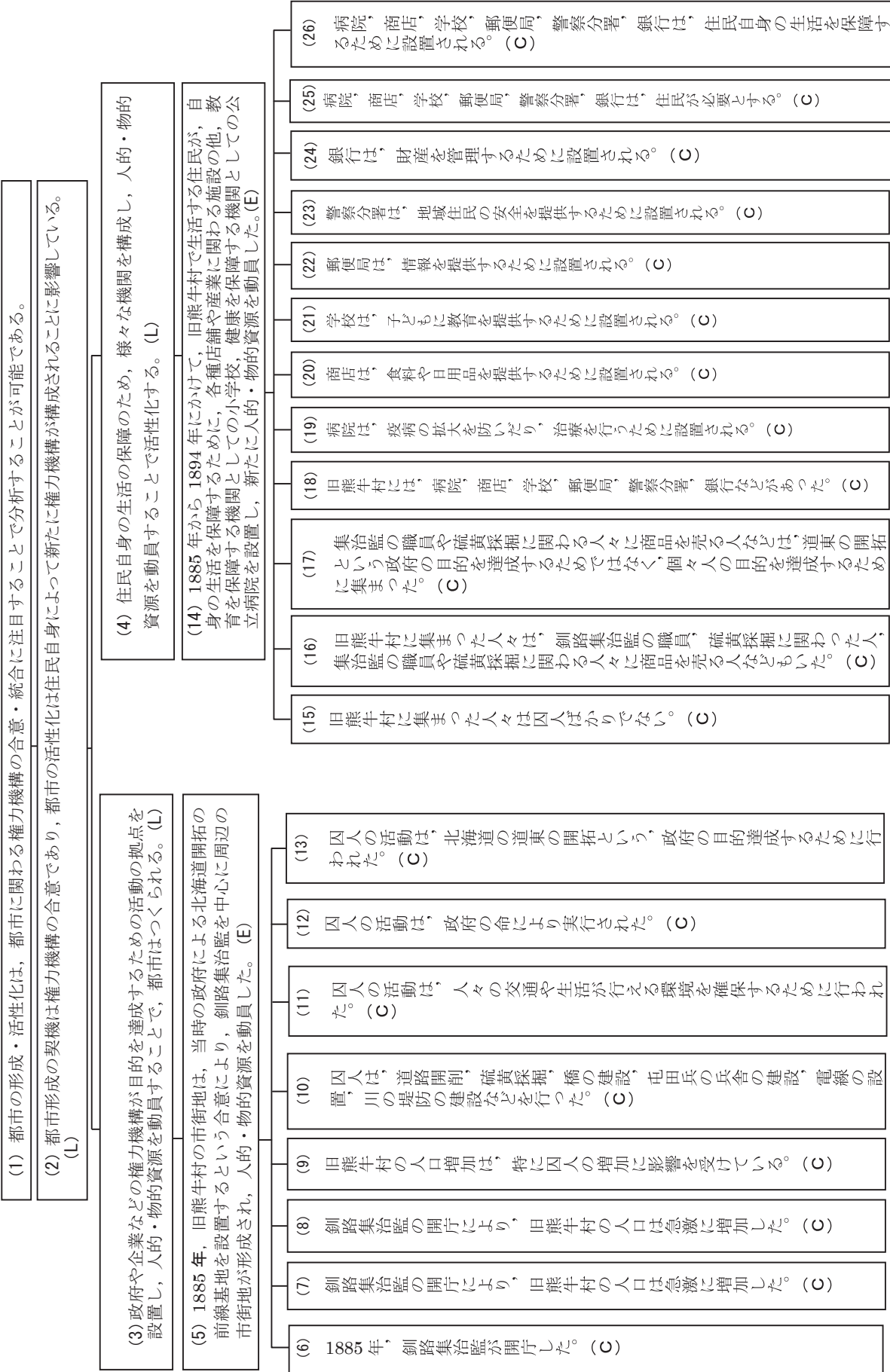


図1 学習成果構造図

(筆者作成)

## V 評価問題試案の作成

学習成果構造図に基づいて、単元「都市形成の論理」の学習評価問題試案を作成する。以下に掲げる評価問題群は、社会認識固有の思考の4段階に基づき作成した。**問題1**と**問題2**は、個別的・具体的な社会的事象を識別・確認させるために作成した。**問題3**は、一般的・抽象的社会的事象の識別・確認するために作成した。**問題4**は、授業

において直接学習した分析的質問を想起させるために作成した。**問題5**は、授業において直接学習していない社会的事象に対して、分析的質問を用いて新たな仮説を立てさせるために作成した。**問題6**は、第三の段階で立てた仮説について、その枠組みに当てはまる事実や概念を識別させるために作成した。以下に示すのは、開発した問題試案である。

### 資料1

**問題1** 現在の北海道標茶町にあたる旧熊牛村の市街地は、1885年、次のうちどの機関の合意によって建設されたか？（知識6）

(a)政府 (b)企業 (c)住民

**解答1** (a)政府

**問題2** 次の内、旧熊牛村の市街地を作るに至った目的を最も適当に述べているものは何か？（知識13）

(a)道東に開拓の拠点を設置するため (b)道東に囚人を移送するため  
(c)道東に労働施設を建設するため

**解答2** (a)道東に開拓の拠点を設置するため

資料1は、授業で直接学んだことを踏まえ、学習成果構造図の下位に位置づく**知識(6)**と**知識(13)**を解答することを求めている。解答者に求めることは、個別的・具体的な社会的事象、すなわち

図2「**知識(6)・知識(13)と問題1・2の関係**」に示すように、社会認識固有の思考を規定する仮説形成に基づいた第一段階にあたる個別的・具体的な社会的事象の識別・確認を行うことである。

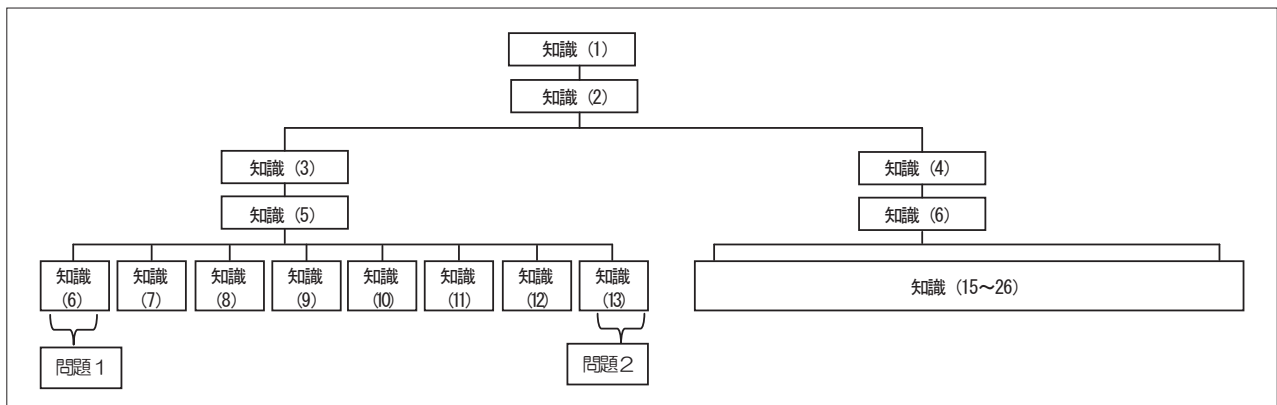


図2 知識(6)・知識(13)と問題1・2の関係

(筆者作成)

資料 2

問題 3 現在の北海道標茶町にあたる旧熊牛村の市街地は、どのような変遷をたどって建設されたか？  
「釧路集治監」、「道東の開拓」、「囚人」、「政府」の語句を用いて説明しなさい。解答文中で用いたそれらの語句には下線を付しなさい。(知識 5)

解答 3 旧熊牛村の市街地は、釧路集治監を中心に、道東の開拓としてつくられた。全人口の内、囚人の占める割合が多く、囚人たちは道路の開削や硫黄採掘など、政府の目的を達成するために働いていた。

資料 2 は、授業で直接学んだことを踏まえ、学習成果構造図の知識 (5) を解答することを求めている。問題文において、知識 (5) の下位にあたる知識 (6)～(7)、知識 (8)～(11)、知識 (12)～(13) を提示している。解答者に求めることは、図 3 「知

識 (5) と問題 3 の関係」に示すように、社会認識固有の思考を規定する仮説形成に基づいた第一段階にあたる、一般的・抽象的社会的事象を識別・確認することである。

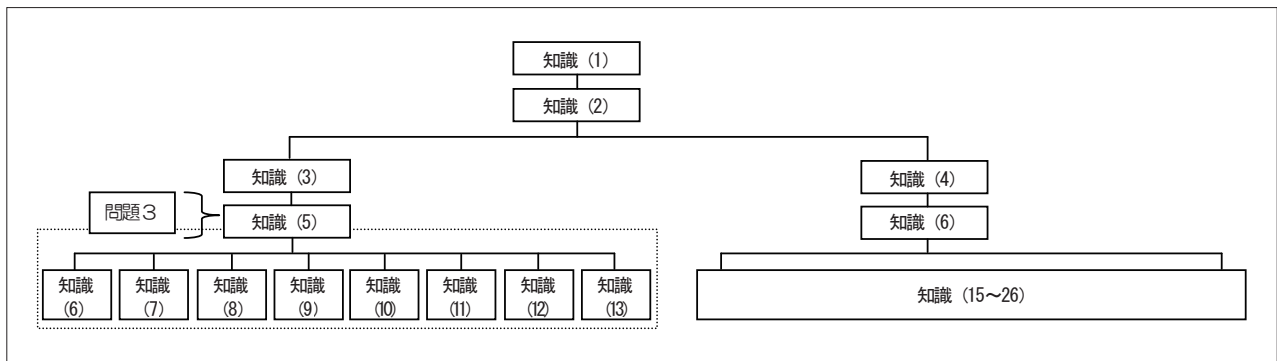


図 3 知識 (5) と問題 3 の関係

(筆者作成)

資料 3

問題 4 なぜ、都市は形成されるのだろうか？ 権力機構の合意、新たな権力機構の構成という観点から述べなさい。(知識 1, 2)

解答 4 都市は、政府や企業などの権力機構が目的を達成するための活動の拠点を設置し、人的・物的資源を動員することで、都市はつくられる。そして、都市に住む住民自身の生活の保障のため、新たな権力機構を構成し、人的・物的資源を動員することで、都市は活性化する。

資料 3 は、授業で直接学んだことを踏まえ、学習成果構造図の知識 (1) と知識 (2) を解答することを求めている。問題文では、知識 (1) と知識 (2) の下位に当たる知識 (3)、知識 (4) を提示している。解答者に求めることは、図 4 「知識 (1) ・ (2) と問

題 4 の関係」に示すように、社会認識固有の思考を規定する仮説形成に基づいた第二段階にあたる、直接授業で学んだ分析的質問を想起する段階である。

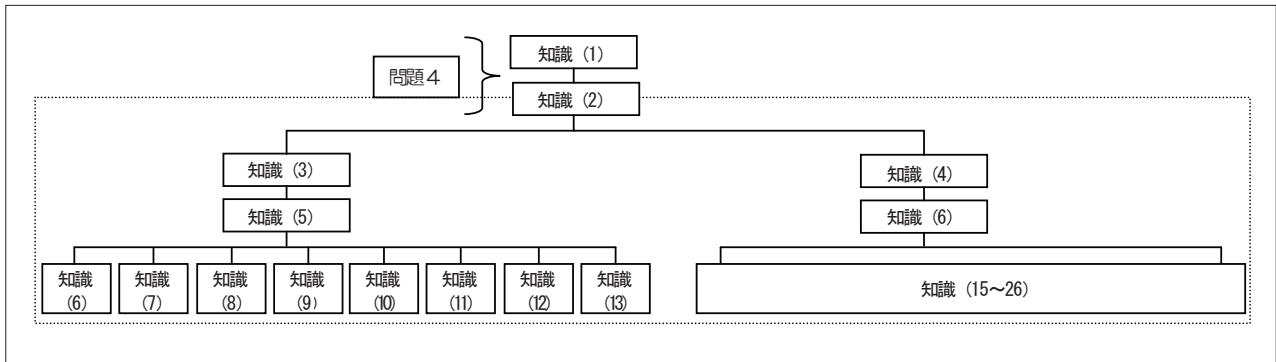


図 4 知識(1)・(2)と問題 4 の関係

(筆者作成)

資料 4

問題 5 次の文を読み、あとの問いに答えなさい。

1840年、清とイギリスの間でアヘン戦争が起きた（知識C）。講和条約として、1842年、清とイギリスの間に南京条約が結ばれた（知識D）。南京条約により上海は開港され（知識E）、イギリスをはじめ欧米諸国が自由な経済活動を行った（知識F）。経済活動は、外国人居留地である「租界」を中心に行われ（知識G）、20世紀前半には中国最大の「華洋雑居」の知となり繁栄を極めた（知識H）。しかし、第一次世界大戦後の中国人のナショナリズムの覚醒（知識I）、1942年末の太平洋戦争の開戦により日本の管理政策の激化（知識J）、1949年中国共産党による上海開放（知識K）により一時期衰退に至った（知識L）。1992年、南方視察を行った鄧小平によって上海は再開発されることになった（知識M）。

問 なぜ、都市が衰退することがあるのだろうか？「都市を形成する目的」という観点から説明しなさい。

解答 5 都市には、都市を形成する目的を達成するために、政府や企業などの権力機構の合意によって建設される。そのため、事件や経済の悪化などにより、政府や企業などの権力機構が都市から撤退したり、目的を喪失したりすることで、都市は衰退する。

資料 4 は、授業において直接学習していない社会的事象に対して、新たな仮説を立てる段階である。リード文において、「上海は、アヘン戦争後、自由な経済活動を行うために建設された都市である。しかし中国国内のナショナリズムの高揚、第二次世界大戦、中国共産党による政策などの影響を受け、自由な経済活動が出来なくなり、一時期衰退した。」（知識B）を頂点とする知識(C)から知識(M)を提示している。解答者に求めることは、

社会認識固有の思考を規定する仮説形成に基づいた第三段階にあたる、授業において直接学習していない社会的事象に対して、新たな仮説「事件や経済の悪化などにより、政府や企業などの権力機構が都市から撤退したり、目的を喪失したりすることで、都市は衰退する。（知識A）」を立てることである。以下に問題 5 に基づく図 5 「問題 5 における知識の構造図」を示す。

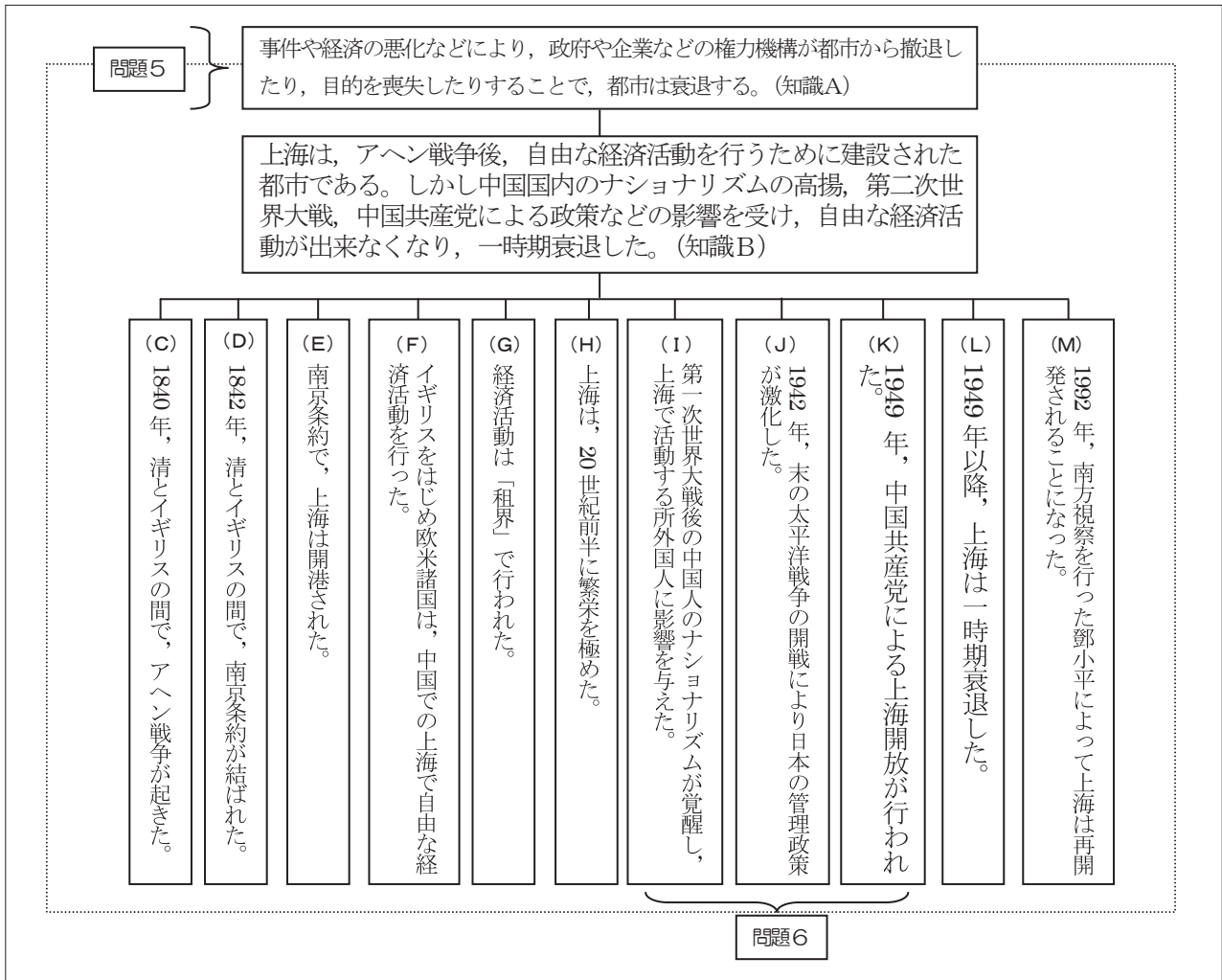


図5 問題5・問題6における知識の構造図

(筆者作成)

資料5

問題6 なぜ、20世紀前半に繁栄していた中国の都市の一つである上海は、一時期衰退したのだろうか？その要因を三点述べなさい。

解答6

- (a) 第一次世界大戦後の中国人のナショナリズムの覚醒
- (b) 1942年末の太平洋戦争の開戦により日本の管理政策の激化
- (c) 1949年中国共産党による上海開放

資料5は、授業において直接学習していない社会的事象に立てた仮説に対して、その要因を識別する段階である。解答者に求める事は、解答6の仮説形成に至った、図5「問題5・問題6における知識の構造図」に示す、「第一次世界大戦後の中国人のナショナリズムの覚醒(知識I)」、「1942

年末の太平洋戦争の開戦により日本の管理政策の激化(知識J)」、「1949年中国共産党による上海開放(知識K)」という個別的・具体的、あるいは一般的・抽象的社会的事象についての事実や概念を識別することである。

## VI おわりに

本稿は、社会科の学習評価の設計を明らかにするために、四点のアプローチから論じてきた。第一に具体的な授業を提示し、第二に提示した授業における学習成果を決定し、第三に決定した学習成果に基づく評価規準の作成を行い、第四に評価規準に基づく評価問題試案を作成することであった。

第一のアプローチについては、単元「都市形成の論理」を開発することで具体的な授業を提示することができた。第二のアプローチについては、単元「都市形成の論理」における知識を、初期事象、結果、法則という関係による学習構造図として示すことで学習成果を確定することができた。第三のアプローチについては、社会認識固有の思考を仮説形成と検証に規定し、社会認識の段階を4段階と示すことで、評価規準を示すことができた。第四のアプローチについては、学習成果の確定と社会認識固有の思考に基づき、方略の一端を示すことができた。

これら第一から第四のアプローチを通じて、単元における学習成果を確定した。そこで今後の研究として、①子どもが評価規準を把握する方略として、ルーブリックやポートフォリオを用いた授業構築方法を明らかにすること、②明らかにした授業構築方法に基づき単元を再構築すること、以上二点に取り組むものとする。

### 【註】

- 1 棚橋健治『アメリカ社会科学習評価研究の史的展開』、風間書房、2002、pp. 2-4.
- 2 同上.
- 3 池野範男らによる学習評価に関する研究は、以下に示す論文に詳細が示されている。
  - 1) 池野範男・渡部竜也・竹中伸夫「認識変容に関する社会科評価研究(1)」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第10巻、2004、pp. 61-70.
  - 2) 池野範男、竹中伸夫、田中伸、二階堂年恵、川上秀和「認識変容に関する社会科評価研究(2)—小学校

地図学習の評価分析—」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第12巻、2006、pp. 255-265.

- 3) 池野範男、竹中伸夫、田中伸、二階堂年恵、丹生英治・田口絃子「認識変容に関する社会科評価研究(3)—中学校公民単元『国際連合について考える』学習の評価分析—」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第12巻、2006、pp. 267-282.
- 4 橋爪大三郎『民主主義は最高の政治制度である』現代書館、1992、pp. 1-2. 参照。
- 5 学習成果確定にあたっては初期条件(C)、結果(E)、法則(L)から分析するポパー・ヘンベル法を用いた。ポパー・ヘンベル法では、説明されるべき事象Eの生起が初期条件Cと法則Lによって演繹される構造となる。単元では、個別的・具体的社会的事象を(C)、権力に着目した都市の分析方法を(L)、旧熊牛村の市街地形成の契機・活性化について(E)として位置づけた。詳しくは、戸田善治「社会科における説明」社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書、1994、pp. 187-96. を参照。
- 6 思考の成長については、棚橋健治氏がアメリカの新社会科の典型的事例であるホルト社会科を分析し提示している。棚橋健治「社会科における思考の評価—アメリカ新社会科における探求テストを手がかりにして—」全国社会科教育学会『社会科研究』第40号、1992、pp. 178-180. より参照。
- 7 社会認識固有の思考と評価の関係については、同上、pp. 180-181. に詳しい。
- 8 評価規準となる社会科認識固有の思考については、同上、pp. 177-178. を参照。

### 【参考文献① 社会科における評価に関する文献】

- ①棚橋健治「社会科における思考の評価—アメリカ新社会科における探求テストを手がかりにして—」全国社会科教育学会『社会科研究』第40号、1992、pp. 173-182.
- ②棚橋健治「社会科の本質と学力評価—アメリカ社会科学習評価研究史の位相—」全国社会科教育学会『社会科研究』第51号、1999、pp. 1-10.
- ③棚橋健治、森才三、森分孝治他「近現代史学習の授業開発研究(V)—『小単元—エスニック問題に揺れるドイツ』の学習評価問題—」『広島大学学部・附属学校協同機構研究紀要』第29号、2001、pp. 55-64.
- ④棚橋健治『アメリカ社会科学習評価研究の史的展開』、風間書房、2002.
- ⑤池野範男・渡部竜也・竹中信夫「認識変容に関する社会科評価研究(1)」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第10巻、

2004, pp.61-70.

- ⑥ 桑原敏典「合理的思想形成を目指した公民学習における評価方法」社会系教科教育学会『社会科系教科教育学研究』第16号, 2004, pp.63-71.
- ⑦ 池野範男, 竹中伸夫, 田中伸, 二階堂年恵, 川上秀和「認識変容に関する社会科評価研究(2)—小学校地図学習の評価分析—」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第12巻, 2006, pp.255-265.
- ⑧ 池野範男, 竹中伸夫, 田中伸, 二階堂年恵, 丹生英治・田口紘子「認識変容に関する社会科評価研究(3)—中学校公民単元『国際連合について考える』学習の評価分析—」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第12巻, 2006, pp.267-282.
- ⑨ 藤本将人「小学校社会科の評価技法」原田智仁編『社会科教育のフロンティア—生き抜く知恵を育む—』保育出版社, 2010, pp.163-168.
- ⑩ 藤本将人「社会科教育の評価」社会認識教育学会編『中学校社会科教育』学術図書出版社, 2010, pp.165-175.

## 【参考文献② 授業開発に関する文献】

- ① 寺島敏治『釧路短期大学生涯教育センター 第1座 テキスト 標茶の歴史(1) 標茶歴史点描』, 釧路短期大学・標茶町教育委員会, 1992.
- ② 三栖達夫『釧路短期大学生涯教育センター 第5講座 テキスト 標茶の歴史(3) 釧路集治監』, 釧路短期大学・標茶町教育委員会, 1994.
- ③ 社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書, 1994.
- ④ 藤田弘夫『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするか—』中公新書, 1993.
- ⑤ 村上孝一「移住, 開墾と開拓期の生活」山田伸一他『北海道開拓記念館 常設展示解説書5 開けゆく大地』北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会, 2000, pp.9-20.
- ⑥ 原田智仁『世界史教育内容開発研究—理論批判学習—』風間書房, 2000.
- ⑦ 社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ』明治図書, 2003.
- ⑧ 平岡昭利編『北海道 地図で読む百年』古今書院, 2004.
- ⑨ 伊藤和明『日本の地震災害』岩波書店, 2005.
- ⑩ 榎本泰子『上海 多国籍都市の百年』中公新書, 2009.

(細川 遼太 釧路校大学院生)

(藤本 将人 釧路校講師)